

ボッティチェッリ作《柘榴の聖母》を巡る一考察

江尻 育世 (京都大学)

15世紀後半から16世紀初頭にかけて、フィレンツェでは世俗の領域において円形の支持体に描かれた「円形画」が流行する。円形画の主題の大半は聖母子像であり、ボッティチェッリによる《柘榴の聖母》(ウフィツィ美術館所蔵)も、そうした時流に乗って制作された円形画といえよう。本作では、中央に聖母子、その周りには六人の天使たちが描かれ、聖母と幼子は本作の通称の由来となっている柘榴に共に左手で触れ合っている。

《柘榴の聖母》は、今日も制作当時の額に収められている。この額の意匠に基づき、H.ホーンが初めて本作品とフィレンツェ共和国との関連性を指摘した。続いて1995年にR.オルソンが発見した関連史料により、1487年マッサイ・ディ・カーメラと呼ばれる行政官の謁見の間のためにボッティチェッリが円形画を制作したことが証言された。現在では、その作品が《柘榴の聖母》であり、政庁(ヴェッキオ宮殿)に所在していたと考えられる上述の行政官の謁見の間のために注文されたことが一般に認められている。一方、先行研究では、前記行政官やその部屋の所在について議論が見られるものの、作品の表現自体や当時の時代背景に関しては等閑に付されてきた感がある。しかしながら本作品は、整然とした人物配置で荘厳に描かれ、同じ円形画でも同時代の私的な空間に飾られた親密な雰囲気と漂わせる聖母子像とは明らかな相違を見せる。また、1470年代から90年代初頭にかけて政庁では北翼三階を中心に改修が進められており、この期間中に注文された本作品と改修計画との関係を検討する必要もあるだろう。そこで本研究では、《柘榴の聖母》の個々の造形特徴に焦点を当て、公的注文としての観点から本作品を分析すると共に、15世紀後半のフィレンツェ及び政庁の状況を視野に入れた作品の解釈を試みる。

具体的には、ビザンティンの伝統を想起させるような1480年代においては古風ともいえる聖母子や、天使たちの表現、風景等の背景が一切排除されている点から、本作品が、当時円形画の主たる受容領域であった私的な家庭のための絵画と異なり神聖性を重視した要素から成り立つことを確認する。そして、これらの要素は一定の司法権を有し公的記録の管理に従事した上記行政官の職務と関連付けられ、画家が設置空間に相応しい造形的選択を行っていたことを指摘する。さらに、本作の額に施された青地に金の百合の意匠が、改修されたヴェッキオ宮殿「百合の間」の主要な装飾モチーフであったことに着目する。この意匠は伝統的にはフィレンツェの自由の守護者フランス王家の紋章であり、1465年にはメディチ家の紋章の一部に加えることが許可されている。こうした事実から、本発表では、《柘榴の聖母》が行政官の職掌に配慮されているだけでなく、行政機関に対してメディチ家の権力がいかに浸透していたかの証左でもあるという見解を新たに提示したい。